

## 看護職者がもつ看護職イメージ

—性役割の視点から—

内海知子\*

香川県立医療短期大学看護学科

### A Study on Images of Nurse in Nursing Staffs

— From the View-point of the Gender Role —

Tomoko Utsumi\*

*Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

**Key Words** : 看護職イメージ (images of nurse), ベム性役割調査 (BSRI), 性役割 (gender role), 両性具有 (androgyny), 看護師 (male nurse)

### はじめに

看護職は、あらゆる職業の中で男性の割合が極めて低い職種の一つである。これは、看護が歴史的にも理念的にも、家庭における母親の役割が職業化してきたという側面をもち、看護職の期待やイメージが母親役割に重ね合わされてきたことに関係している。

春日<sup>1)</sup>は、医療の分野で病んだ人のケアを主たる任務とする看護職について、「母性愛」をすべての女性が備えているという観念を保持する傾向が他の職種に比べて強いため、ケア役割は女性の役割とみなす固定観念があるのではないかと述べている。

このような看護職者自身がもつ「看護＝女性」という意識が、看護職への男性の進出を拒むことに関係しているのではないかと考えられる。本当に看護

\*連絡先：〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

\*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,  
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

とは、「女性の仕事であって、男性のつくような仕事ではない」という性役割の延長線上にある職業なのだろうか。

看護職者の性役割についての研究は、東<sup>2)</sup>らが「個人的属性質問紙」(PAQ)を用いて看護婦を調査したもの、岩永<sup>3)</sup>が、専門職としての自立を阻む障壁となるような性役割観があるかを看護職者のフェミニズム意識で調査したものなどがある。看護職のイメージについての研究は、石井ら<sup>4)</sup>が入院患者を対象に土肥のアンドロジニー・スケールを用い調査したものや、小野寺ら<sup>5)</sup>の看護学生を対象にしたものなど多数ある。しかし、看護職者自身も看護職のイメージを調査した研究は見当たらなかった。

そこで、本研究は、看護職者自身が看護職にどのようなイメージをもっているのかを、性役割の項目を用いて調査した。また、それが、看護職者の性別や、臨床看護婦と看護教員という職務により差があるのかを考察することにより、看護職における男女共担を目指す視点を探ることを目的とした。

## 対象および方法

### 1. 対象

対象は、K県内の看護職者のうち、2病院に勤務する臨床看護職者128人(男性39人、女性89人)と、短期大学看護学科および看護専門学校2校に勤務する看護教員34人(全員女性)である。(以下、臨床看護職者のうち男性だけをさす場合は男性看護職者、女性だけをさす場合は臨床看護婦という。また、臨床看護婦と看護教員を合わせて女性看護職者という。)

### 2. 調査期間と方法

1999年10月に、それぞれの施設の責任者に調査依頼し、留置き法で実施した。アンケート配布後1週間で郵送にて回収した。回収率は87.9%、有効回答率は97.0%であった。

### 3. 調査の内容

看護職者自身が看護職にどのようなイメージをもつか(以下、看護職イメージ)は、日本語版BSRI(ベム性役割調査目録)<sup>6)</sup>を用いて測定した。BSRIは、ベムが1974年に作成した質問紙であり、多数の男女から男女の性役割のステレオタイプを収集することによって項目の選定を行ったもので、採点化段階で、M(男らしさ)とF(女らしさ)が別々に得

点化できる。男性性・女性性・中性性の各20項目について、〔1：非常にあてはまらない〕から〔7：非常にあてはまる〕までの7段階で答えるものである。また、男性性・女性性・中性性項目別に合計し、それぞれの中央値を算出、この中央値を基準に心理的性度を下記の4群に分類する。

I群 両性具有型(男性性高・女性性高群)

II群 男性型(男性性高・女性性低群)

III群 女性型(男性性低・女性性高群)

IV群 未分化型(男性性低・女性性低群)

このほか、全対象者に対して、看護職をめざした動機、看護職における男性割合が低いことについての考え、今後男性看護職者が増えるための条件について調査した。さらに男性看護職者には、男性ということ働きにくく感じた事があるか、またあればその理由、臨床看護婦には、男性看護職と同一部署で働いた経験の有無と、男性看護職に対してどう思うかをBSRIの男性性20項目から選んでもらった。また看護教員には、男子学生を教えた経験の有無、男子学生を受け入れるにあたって困ったことについて回答を求めた。

### 4. 分析方法

看護職イメージについては、各得点の平均値(ほぼ中央値と一致)を性(男性看護職者と女性看護職者)・女性看護職者の職務(臨床看護婦と看護教員)でt検定による比較を行い、その他の項目と性(男性看護職者と女性看護職者)・女性看護職者の職務(臨床看護婦と看護教員)の比較には $\chi^2$ 検定を用いた。

## 結果

男性看護職者の年齢は、40歳代が最も多く14人(35.9%)、次いで30歳代12人(30.8%)であった。女性看護職者のうち臨床看護婦は、40歳代が最も多く41人(46.1%)、次いで30歳代21人(23.6%)であり、看護教員は、30歳代が最も多く16人(47.1%)、次いで40歳代11人(32.4%)であった。

臨床看護職者の臨床経験の平均年数は、17.5年(SD;  $\pm 8.9$ )であり、看護教員の教育経験の平均年数は、6.8年(SD;  $\pm 6.7$ )であった。

看護婦養成所3年課程を卒業したものが最も多く74人(45.7%)、次いで同2年課程を卒業したものの25人(15.4%)であった。

看護職をめざした動機について、全体では123人(75.9%)が「何か資格や技術を身につけたかった

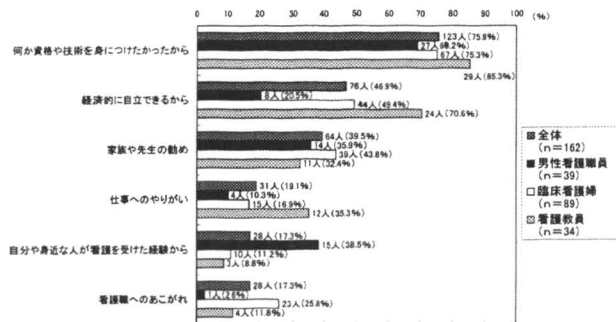


図1 看護職をめざした動機

から」という資格取得をあげており、次いで「経済的に自立できるから」76人 (46.9%)、「家族や先生の勧め」64人 (39.5%)であった。男性看護職者では、「何か資格や技術を身につけたかったから」が27人 (69.2%)と最も多く、「自分や身近な人が看護を受けた経験から」15人 (38.5%)、「家族や先生の勧め」14人 (35.9%)、「人の世話をするのが好きだったから」8人 (20.5%)であった。女性看護職者のうち臨床看護婦は、「何か資格を身につけたかったから」67人 (75.3%)、「経済的に自立できるから」44人 (49.4%)、「家族や先生の勧め」39人 (43.8%)であった。看護教員は、「何か資格や技術を身につけたかったから」29人 (85.3%)、「経済的に自立できるから」24人 (70.6%)、「仕事へのやりがい」12人 (35.3%)であった (図1)。

性による差がみられたのは、「自分や身近な人が看護を受けた経験から」が男性看護職者に有意に多く ( $p<0.01$ )、「看護職へのあこがれ」は女性看護職者に有意に多かった ( $p<0.01$ )。職務による差がみられたのは、「仕事へのやりがい」が看護教員に有意に多かった ( $p<0.01$ )。

看護職における男性の割合が低いことについて全体では、「看護職は女性のイメージが強いので仕方がない」が102人 (63.0%)と最も多く、「看護は女性に適した仕事なので当然である」と考えている人は20%未満であった。性・職務による差はみられなかった (図2)。

男性の看護職が増える条件としては、全体では「看護職の社会的地位を向上させる」が121人 (74.7%)で最も多く、「社会の性差意識をなくする」93人 (57.4%)、「看護教員に男性を入れる」57人 (35.2%)の順であった。男性看護職者では、「看護職の社会的地位を向上させる」29人 (74.4%)が

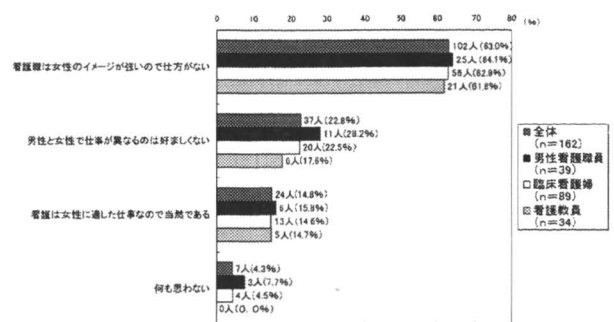


図2 看護職における男性割合が低いことについてどう思うか

最も多く、次いで「給与体系の改善」21人 (53.8%)、「社会の性差意識をなくする」19人 (48.7%)であった。

女性看護職者のうち臨床看護婦は、「看護職の社会的地位を向上させる」67人 (75.3%)、「社会の性差意識をなくする」50人 (56.2%)、「看護教員に男性を入れる」28人 (31.5%)であった。看護教員は、「看護職の社会的地位を向上させる」25人 (73.5%)、「社会の性差意識をなくする」24人 (70.6%)、「看護教員に男性を入れる」16人 (47.1%)であった (図3)。性・職務による差がみられたのは、「給与体系の改善」で、男性看護職者が有意に多く ( $p<0.01$ )、女性看護職者のうちでは看護教員が有意に多かった ( $p<0.05$ )。

BSRIで測定した看護職イメージは、全体では男性性得点106.6点、女性性得点103.5点であった。男性看護職者では、男性性得点104.8点、女性性得点106.4点であった。女性看護職者のうち臨床看護婦では、男性性得点107.6点、女性性得点103.1点であり、看護教員では男性性得点105.9点、女性性得点101.1点であった。これらの得点を、性・職務により比較したが、有意差はみられなかった。

看護職イメージを心理的性度で分類すると、全体ではI群両性具有型51人 (31.5%)、II群男性型27人 (16.7%)、III群女性型22人 (13.6%)、IV群未分化型62人 (38.2%)であった。男性看護職者では、I群両性具有型18人 (46.1%)、II群男性型1人 (2.6%)、III群女性型5人 (12.8%)、IV群未分化型15人 (38.5%)であった。女性看護職者のうち臨床看護婦では、I群両性具有型24人 (27.0%)、II群男性型19人 (21.3%)、III群女性型17人 (19.1%)、IV群未分化型29人 (32.6%)であり、看護教員ではI群両性具有型9人 (26.5%)、II群男性型7人 (20.6%)、III

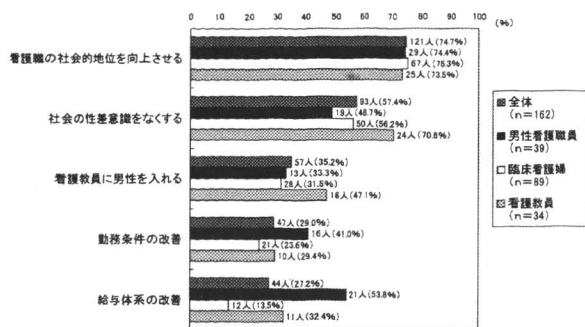


図3 看護職に男性が増えるためには

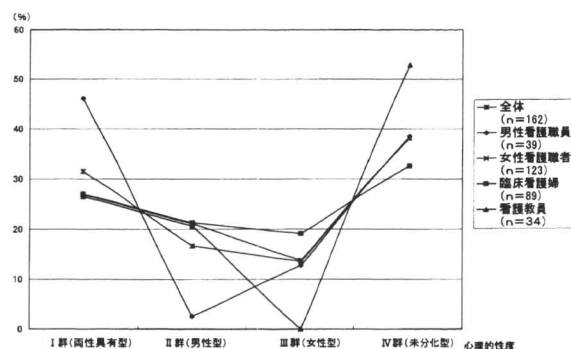


図4 看護職イメージ (心理的性度で分類)

群女性型0人、IV群未分化型18人 (52.9%)であった (図4)。

男性看護職者で、男性ということに働きにくく感じた事がある人は18人 (46.2%)であり、理由として「男性の人数が少ないので肩身がせまい」10人 (55.6%)、「女性と一緒に夜勤では気を使う」・「働く領域が限られている」7人 (38.9%)であった。また、現在の領域 (全員が精神科勤務) 以外の領域で働きたいかには、34人 (87.2%)がはいえと答えており、その理由として「現在の職場に満足している」20人 (58.8%)、「他の領域では、看護師は受け入れられにくい」14人 (41.8%)であった。

臨床看護婦で、男性看護職者と実際に同一部署で勤務した経験を持つ人が、81人 (91.0%)で、男性看護職者に対して、「負けず嫌い」52人 (58.4%)、「個人主義的」46人 (51.7%)、「自分の意志を押し通す力がある」45人 (50.6%)と感じていた。

看護教員で、男子学生を教えたことがある人は、16人 (47.1%)で、男子学生を教えるうえで困ったことは、「男子学生が少ないため学生間で孤立してしまう」8人 (50.0%)、「母性実習での実習施設側の受け入れ」6人 (37.5%)、「臨床実習では、スムーズに家族や患者の受け入れを得ることができない」4人 (25.0%)であった。

## 考察

まず、看護職をめざした動機について、男性看護職者の結果は、看護系の雑誌が1992年に行った調査とほぼ同じ結果<sup>7)</sup>であった。この調査では「看護師になる」といったときの親や友人等の反応についても聞いており、それによれば3割の人が反対にあり、理由として「看護は女性の仕事だから男は向か

ない」「社会的評価の点で不満がある職業だ」というものであった。

今回の調査で、「自分や身近な人が看護を受けた経験から」看護職をめざした人が、男性看護職者に有意に多く、「看護職へのあこがれ」をあげた人が女性看護職者に有意に多かったことから、男性が女性のイメージの強い職業につくには、直接的な強い動機 (体験) がなければならないと考えられる。

匠は<sup>8)</sup>、職種間の男性と女性について、新しくできた職種ほど女性の進出は著しいという傾向を指摘している。つまり、新しい職種はその職種に対するイメージが出来上がっておらず、性別を問題にする意識がないのである。しかし、看護職は家庭における母親役割が職業化したという側面を持つため、女性職として位置づけられてきた。このような、職業における女性職・男性職の存在は、その社会の持つ女らしさ、男らしさのイメージと結びついており、性別役割の固定化が要因となり、結果的にその意識を助長継続することにもなっている<sup>9)</sup>。

また、「経済的に自立できるから」看護職をめざした人が女性看護職者に有意に多く、看護職に男性が増えるための条件について、「給与体系の改善」をあげた人が男性看護職者に多かったことは、給与の捉え方に性差があると考えられる。つまり、女性は職業を得ることで経済的に自立できると考え、男性は看護職をひとつの職業として捉え、他の職業との比較から看護職は経済的評価が低いと考えているのではないだろうか。

次に、看護職における男性割合が低いことについては、その対策として、性・職務に関係なく70%以上が「看護職の社会的地位を向上させる」、50~70%が「社会の性差意識をなくする」と答えている。看護職者は、看護職に男性が増えないことを仕方がない

こととあきらめに似た気持ちを持ち、社会の評価が得られれば、自然と男性の看護職者が増えると考えているといえる。

しかし、アン・ハドソン・ジョーンズ<sup>10)</sup>が、女性的な役割と結びついた看護婦の否定的なイメージはたぶん一掃できないだろうと述べているように、現実には「白衣の天使」に代表される看護職のイメージは女性としての看護婦のイメージであって、看護に必要とされる知性を反映したイメージではない。日本における「白衣の天使」というイメージは、明治以降の忍耐と奉仕に徹することを当然とした看護教育と、権威への絶対服従を美徳化して忍従を強いた当時の社会体制の中で生れてきたものであり、21世紀を目の前にした今も変わらないのである。

最後に、BSRIで測定した看護職イメージであるが、今回の調査では女性性得点が低く、看護職者は「看護＝女性」と捉えてはいないという結果であったと言える。そして、性・職務による差はみられなかった。また、看護職イメージを心理的性度分類でみると、男性看護職者の約半数は両性具有性で捉え、女性看護職者は3割が両性具有性、未分化性で捉えていた。

両性具有性は、男性役割と女性役割が別々の次元に属するなら、両方の性役割を共に備えた人も存在するはずということで雌雄の合成語アンドロジニーと名づけられたものである。ベムのBSRIは、心理学的アンドロジニーを体現している人物を選別することを主な目的として作成されており、アンドロジニー的人物とは、男女いずれかの性の型づけを受けてこなかったもの、男性役割と女性役割のいずれの役割も状況に応じて自由に選べるものを意味している<sup>11)</sup>。また、ベムの仮説は両性的な人に最も適応力があり、未分化的な人が最も適応しないとしている。今回の調査の結果では、看護職者は、看護職を性役割の延長としては考えておらず、状況に応じて両方の役割が必要な職業、また両方の役割を備えていなければならない職業として考えているといえるのではないだろうか。

看護職に求められているものは、時代と共に当然変わってきている。看護職に求められる能力には、コミュニケーション技術、科学的観察能力、判断力、マネジメント能力などがあり、これらの能力は女性のほうが優位だとは言えない<sup>12)</sup>。看護職を本当の意味での科学と経験に裏付けられた専門職として捉えるなら、男だから・女だからという理由で選ぶという明らかな根拠はなく、看護そのものは性役割の

延長線上にあるものではなく、「性」は看護職者個人の特質に過ぎない考える。

看護職は男女が自由に選択できる職業でなければならないが、看護職に男性が多くなることは、それまで看護職がもつ問題が女性の問題であったり女性の職業が持つ問題だったりしたことが、看護職がもつ性格や特性が明確となり看護職の問題として捉えることができるようになるという側面も持つ。

今回の調査では、看護職者がもつ看護職のイメージをBSRIで測定した。このような性役割スケールはいくつかの限界を指摘され、現在も新しいスケールが研究されている。それは、同じ女性の中でも伝統的な役割意識を持った人とフェミニズムの立場の人では自分の持つ性役割規範や価値観が違いため、同じ性役割スケールを用いても評価の枠組みが異なり、結果的に測定値が違ってくるなどである。

そして、今回は看護職者だけの調査となり、ほとんどの臨床看護婦は男性看護職者と同一の職場で働いた経験を持っていた。このような経験は、看護職における性役割意識に何らかの影響を与えることが考えられる。今後は、一般病院の看護職者にも調査を広げると共に、看護職以外の人との比較などを通して看護職がもつ性役割意識について検討していきたい。また、今回の調査で女性看護職に多かった、未分化型と適応との関係についても検討していきたい。

## 結論

男性看護職者39人、女性看護職者123人（臨床看護婦89人と看護教員34人）を対象に、看護職者がもつ看護職のイメージをBSRIを用いて調査した。そして、性と職務による差を比較検討し、以下の結果を得た。

- (1) 看護職者は、看護職イメージを「女性性」では捉えていなかった。
- (2) 看護職イメージの捉え方は、性による差はなく、男性看護職者は半数が、女性看護職者は3割が「両性具有性」で捉えていた。
- (3) 看護職イメージの捉え方は、臨床看護婦と看護教員という職務による差はなく、両者とも「女性性」で捉えている人が最も少なかった。
- (4) 看護職における男性割合が低いことについては、性・職務による差はなく6割の人が「看護職は女性のイメージが強いので仕方がない」と考えていた。

(5) 看護職に男性が増えるためには、全体の7割が「看護職の社会的地位を向上させる」としている。男性看護職者は「給与体系の改善」をあげたものが半数で、女性看護職者に比べ有意に多かった。

(6) 男性看護職者の4割が、「他の領域（精神科以外）では看護師は受け入れられにくい」という理由で、他領域での仕事を否定していた。

以上のことより、看護職が男女共担できる職業となるためには、まず看護職が女性の職業である限り職業として差別があり、社会的評価が低くなるという現実のシステムを、看護職者自身が知る必要がある。また社会が、歴史的に女性が行ってきた子供や老人・病人などに対するケアに低い評価しか与えてこなかったため、看護職も低い評価しか得られていない事を知る必要がある。

そして、看護職者自身が「看護職は女性のイメージが強いので仕方がない」とあきらめずに、看護という専門性を持った職業からのイメージとなるよう、努力を続けなければならない。

## 文献

- 1) 春日キスヨ (1998) 女性の意識変革の先駆けに。看護教育, 39: 736-739.
- 2) 東清和, 小倉千加子 (1997) “性役割の心理”, 大日本図書, 東京, p169-171.
- 3) 岩永智恵子 (1997) 看護職のフェミニズム意識と性役割観。日本看護研究学会雑誌20 (3): 167.
- 4) 石井弥生, 小泉仁子, 三隅順子, 増田敦子 (1999) 入院患者における看護婦イメージの変化-アンドロジニー・スケールを用いて-。日本看護研究学会雑誌, 22 (3): 253.
- 5) 小野寺杜紀, 波多野梗子 (1995) 男子看護学生の看護職に対するイメージ。看護教育, 36: 970-976.
- 6) 安達圭一郎, 上地安昭, 浅川潔司 (1985) 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) -日本語版 BSRI 作成の試み, 日本教育心理学会第27回総会, p484-485.
- 7) 看護展望編集部 (1992) アンケートにみる看護師の意識。看護展望, 17 (4): 34-55.
- 8) 匠雅音 (1992) “性差を越えて”, 新泉社, 東京, p.16-20.
- 9) 佛教大学総合研究所編 (1999) “ジェンダーで社会政策をひらく”, ミネルヴァ書房, 京都, p.66.
- 10) Anne Hudson Jones (1988) “Images of Nurses”, 1st ed. University of Pennsylvania Press, Pennsylvania.  
[中島憲子監訳 (1997) “看護婦はどう見られてきたか”, 時空出版, 東京, p.1-5]
- 11) 平野貴子, 神田道子, 小林幸一郎, Joanna Liddle (1995) 女性の職業生活と性役割, “日本のフェミニズム3” (井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子編) 岩波書店, 東京, p179-199.
- 12) 志摩チヨ江 (1998) “看護は文化”, メヂカルフレンド社, 東京, p161-162.

受付日 2000年3月17日